

電気のふるさと

特集

「協働」と「連携」によるまちづくり③

～田辺周辺広域市町村圏組合の地域活性化事業～

圏域市町村の取り組みを連携させて
更なる地域活性化を目指す

■わがまち自慢 ～村長室から～
新潟県刈羽村

■電源地域情報ひろば
平成25年1～3月のイベントカレンダー

■電源地域振興トピックス
被災地の自立促進支援の動きと産消交流

■センター活用術 ～活力ある地域づくりに向けて～
電源地域振興センターの企業誘致支援サービス

■センター掲示板

■第3回「電気のふるさと」フォトコンテスト 開催のご案内

わがまち自慢 ～村長室から～

かりわ
新潟県刈羽村
しなだ ひろお
品田 宏夫 村長



本年12月に、村政をお預かりして4期目を迎えることとなりました。この12年間、私が最も訴えてきましたのが「村民が自ら考え行動し責任を負うまちづくり」です。とかく行政は、住民に対して「ああせい、こうせい」と注文をつけますが、そうすると住民の側は「ああしてもらいたい、こうしてもらいたい」と行政を頼ります。それでは、本当の意味でまちづくりはできません。村民が自ら考え行動することに対して行政は公的支援をする、村民も責任を取っていただく、といった自律的なまちづくりが極めて重要だと思います。

刈羽村はこの10月に『びあパークとうりんぼ』*という大型複合施設をオープンさせました。JFA公認のサッカーコート2面と宿泊交流センターやカントリーハウス風のカフェのスイーツガーデン、施設園芸の大型ハウスと園芸トレーニングセンター、新潟大学の先端農業バイオ研究センターなどの施設群ですが、刈羽村の発展に欠かせない要素を有機的に配置した村の新しい財産です。

この事業は原子力発電所と立地地域の共生を表そうという主旨のもと、刈羽村地域共生事業と銘打ち東京電力㈱の寄付で実施したものです。平成9年の発電所完成以来、長い年月をかけて練り上げ、平成22年3月に寄付を受けて「農業・加工物販・飲食・集客」という4つの事業コン

セプトでスタートしました。これをもとに村民にもアイデアを募りましたが、当初から、「公設民営」で運営し、運営各部署は自立して施設の経営にあたっていただくという構想でした。つまり「行政がこのようなものを造りたい」というものから「皆さん方がビジネスをできる環境を行政が用意する」というものでした。

そのため、私たちは長い時間をかけて、事業参画希望の企業や村民の皆さんと、寄付をしていただいた東京電力との間で協議を積み重ねてきました。従来の公共事業や共生事業のあり方を変えたい、という思いがありました。その意味で、この「公設民営」を理解していただき、今回の大型複合施設の開設が可能になったのも、冒頭の「村民が自ら考え行動して責任を負う」ということが村民の間に浸透した結果だと思っています。

職員の意識も変わってきました。私たちは、平成16年の中越地震と平成19年の中越沖地震という2度の大きな地震を経験しましたが、職員は復旧・復興に向けて、文字通り獅子奮迅の働きをしました。他の一部の被災地では職員の残業手当をカットするという話もありましたが、村内に20ある行政区と刈羽村議会は全会一致で職員の残業手当の支給を認めたのです。つまり村民挙げて職員に感謝するという評価をいただいたわけです。この「成功体験」が、

職員の意識変革のきっかけになっています。小さい村だからできるという意見もあるようですが、「いかに村民と寄り添って仕事をを行ったか」という結果だと思います。

行政の場面では、村民に対する「事業説明」や、ときに「説得」などを行うことがあります。それが仕事だと思ってしまうこともあります。だが、実は「共感してもらえ」ことが行政職員の仕事なのです。住民の要望をどのように実現するかを住民とともに考えていくことです。そのためには、職員は日常的に「顔を見せる」「本音を語る」ということが大事です。そうすれば、キメの細かい行政サービスができます。県や国を見て仕事をするのではなく「村民を向いて仕事をするか」が大切で、今後も私たちは「村民とともにスクラムを組む」という姿勢を貫きたいと思います。

刈羽村には、お話しした『とうりんぼ』の他にも特産品の『砂丘桃』や『刈羽米』といったものがありますが、一番自慢できるのは、職員を含め「自ら考え行動し責任を負う」、そうした村民といえます。(談)

※ 刈羽村地域共生事業『びあパークとうりんぼ』

平成24年10月1日にオープンした大型複合施設。施設内には、JFA公認の人工芝サッカー場2面と温浴施設を併設した宿泊交流センター『ピーチビレッジ』、新潟県のブランドイチゴの『越後姫』やトマトを栽培する園芸ハウスと刈羽村特産の『砂丘桃』の圃場、カフェを併設した洋菓子や和菓子を販売する『スイーツガーデン』、ハウス園芸振興のために生産者に野菜の栽培方法のトレーニングを行う『JA柏崎・刈羽園芸サポートセンター』、新潟大学の農業研究施設『新潟大学 刈羽村先端農業バイオ研究センター』などがある。

「スイーツガーデン」



「ピーチビレッジ」の露天風呂「桃の湯」



「びあパークとうりんぼ」全景



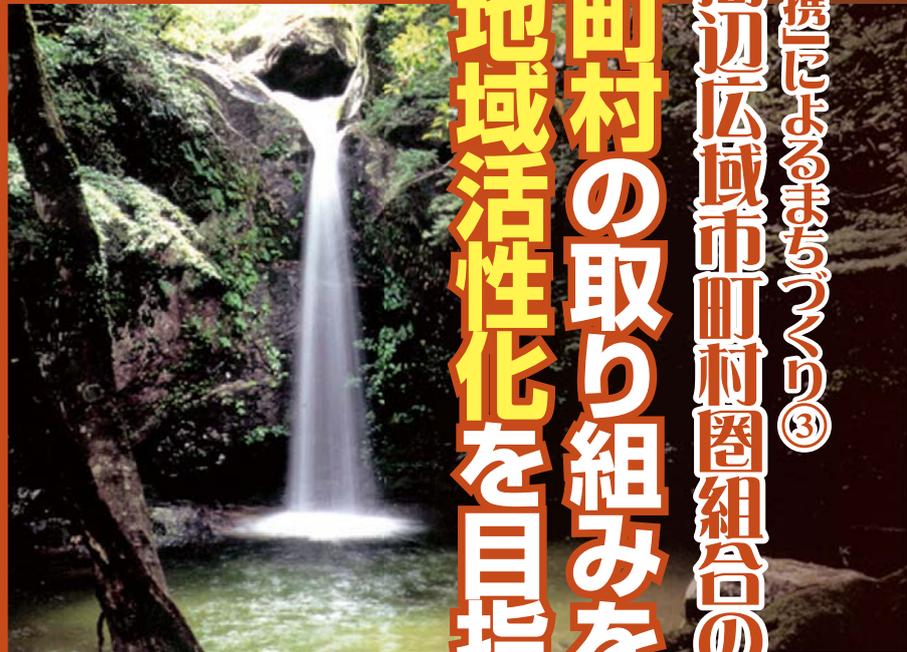
びあパーク
とうりんぼ
Peach & Agriculture Park

特集

「協働」と「連携」によるまちづくり③

田辺周辺広域市町村圏組合の地域活性化事業

更なる地域活性化を目指す
圏域市町村の取り組みを連携させて



和歌山県の中央部に位置する田辺周辺広域市町村圏組合は田辺市、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町の1市4町で構成されている。昭和46年以降、文化・医療環境の整備事業を行ってきたが、近年、この土台の上に、地域産業を「連携」によって活性化させようという動きが高まっており、今回はその取り組みを紹介する。



【写真】

上段左上：龍神村の護摩壇山頂付近の「ごまさんスカイタワー」では樹氷が見られる
上段左下：世界遺産「熊野古道」を歩くツアー。険しい道が続くので入念な準備運動は欠かせない
上段右上：肉厚でやわらかい果肉が特徴のブランド梅「南高梅」は梅酒にしてもおいしい
上段右下：大塔日置川県立自然公園の「雨乞いの滝」。百間山溪谷にはたくさんのお名瀑がある
下段左上：大塔川を堰き止めた野趣あふれる大露天風呂・川湯温泉の「仙人風呂」(冬季限定)
下段左下：農業法人・株式会社 秋津野が経営する農家レストラン「みかん畑」
下段右：「熊野古道・中辺路」(「発心門王子」～「水呑王子」間)。この先に「熊野本宮大社」がある

地域資源の豊富な紀南地域で 広域市町村圏組合を結成

大阪の中心部から直線で約100km、紀伊半島の南西部に和歌山県の1/3を占める田辺周辺広域市町村圏は位置する。地形のほとんどが山地と丘陵地で、海岸線に山地がせり出して、河口部がわずかな平坦地となっている。

そうした地形を活用して、昔から「紀州みかん」で知られる柑橘類や、今ではトップブランドとなった「南高梅」などの梅、花卉栽培などの農業が盛んな土地だ。

また、黒潮紀南分流が流れる太平洋に面した漁港ではカツオ、アジ、

サバ、シラス、イセエビなどに加え、「ヒロメ」と呼ばれる海藻類の水揚げでも知られる。

さらに、世界遺産「熊野古道」を有し、白浜温泉や日本三美人の湯「龍神温泉」、「熊野本宮温泉郷」、パンダで知られる「南紀白浜アドベンチャーワールド」など、観光資源にも恵まれた地域となっている。

近年では田辺市の「秋津野ガルテン」にみられるニューツーリズム、白浜町の「南紀州交流公社」の教育旅行、「企業の森」にみられる都市農村交流などの取り組みも盛んに行われている地域でもある。

田辺周辺広域市町村圏組合は昭和46年、田辺市と日高郡の龍神村、南部川村、南部町、西牟婁郡の白浜町、上富田町、大塔村、中辺路町、日置川町、すさみ町の10市町村で結成された。古くからこの地域は、通勤・通学をはじめ日常生活圏としてつながりが強く、経済圏としても相互の連携が深いところだ。

当初は紀南文化会館の建設・管理や、輪番制病院（休日救急）の運営支援、休日急患診療所開設といった文化・医療環境の整備を進めてきたが、平成4年「ふるさと市町村圏」に選



定され、10億円の「ふるさと市町村圏基金」を開設し、平成7年に積み増しを行って20億円の基金となる。平成16～18年のいわゆる「平成の大合併」を経て、現在では田辺市（田辺市、龍神村、中辺路町、大塔村、本宮町）、みなべ町（南部町、南部川村）、白浜町（白浜町、日置川町）、上富田町、すさみ町の1市4町で構成する。平成18年、経済産業省の「広域市町村圏産業振興ビジョン調査モデル事業」の対象地域として採択された

ことよって、翌19年に「広域市町村圏産業振興ビジョン・アクションプラン」を策定。平成20年には「健康・観光産業クラスター推進協議会」を設置し、基金の運用益を活用して、圏域内での都市体験交流事業や人材育成事業、産品開発・販路拡大事業を展開してきた。

このように、田辺周辺広域市町村圏組合の大きな特徴は、文化や医療環境の整備事業に加えて、地域の活性化を目的とする事業の取り組みにある。



梅の花が一齐に咲き誇る紀南地域の春

左上: 日本三美人の湯のひとつに数えられる「龍神温泉」
 左中: 県の無形民俗芸能に指定されている「上野の獅子舞」
 左下: 平成17年にオープンした「扇ヶ浜海水浴場」
 右上: 全国の熊野神社の総本社「熊野本宮大社」
 右下: 「熊野古道・中辺路」沿道の神社「発心門王子(ほっしんもんおうじ)」

「健康・癒し」という付加価値を付けて 地域を強固に売り込む

その中心となって事業を推進してきたのが田辺市だ。

田辺市長の真砂充敏さんは言う。

「紀南地域は開拓精神に溢れる土地柄です。トップブランドである『南高梅』は今で言う『産学連携』によって生まれたもので、世界遺産の『熊野古道』や白浜温泉や龍神温泉などの名湯など観光資源にも恵まれている。熊野は歴史的に『癒し・再生』という意味合いを持つ土地で、人々は『熊野参詣』を行って『再生して帰る』というようなことが繰り返されてきました。小栗判官の物語がそれを表しています。だが、営業力が弱い。そのために私どもは産業部というものを設置しました。『癒し』や『健康』といった付加価値を付け、有機的な広域連携の力で産地間競争に勝っていきたい。キーワードは『癒し・健康』と『営業力』です」

10年ほど前まで、田辺市の産業政策は企業誘致に重点を置き、I・T産業の企業集積を目指していたが、リーマンショックを契機に「誘致よりも立地へ」という産業政策の転換期を迎えることとなった。

平成19年3月、同年1月策定の「田辺市広域市町村圏産業振興ビジョン」に続き「第1次田辺市総合計画」を策定。産業の活性化を図るため、産業間、地域間の有機的な連携を図り、相乗効果を発揮させるとともに、国内外へ効果的な情報発信を行い、豊富な地域資源を活用して、新産業を創造していくこと等が示された。

広域による農林漁業、商工業、観光業の連携で地域産業力を強化し、新産業を創出するという「新たな価値創造」を目指す取り組みを開始することとなったのだ。

平成20年、市庁舎に産業部を設立。産業部内に置かれた産業政策課では、産業間、地域間、団体間の連携を一層強めるための地域コーディネーターを配置し、合併によって多種多様な地域産業の6次産業化や農工商連携による産品開発、グリーンツーリズム、ソーシャルビジネスに取り組み人材の育成、販路拡大等の取り組みを行ってきた。

そうした事業で、域内をはじめ全

国各地を飛び回るのが、昨年4月に新設された交流推進係だ。設置当初の陣容は係長の山本良明さんと地域コーディネーターの岸上光克さん、それに松本早也香さんの3人で、現在は4人体制。

係長の山本さんは「やはり、現場が大切です。自分で解決できないところは内外との連携で乗り切ることができるところを現場の中から学びました。産品開発や販路拡大、人材育成も人との交流によるヒントや気づきが大切だと思っています」と語る。

松本さんは田辺周辺広域市町村圏組合の柑橘類や梅の生産者などと近畿農政局の「6次産業倶楽部」に参加している。そこには大阪や神戸のバイヤーや農協も参加しており、産

品開発や販路開拓などをサポートする。

「やはり、この地域は『南高梅』のブランド開発にみられる先人からのDNAが受け継がれているの

か、起業意識の高い人が多いように感じます。こうした場を大切にして、地域づくりまでを射程に入れた生産者・事業者の数を拡大していきたい」と松本さんは言う。

地域産業活性化を 広域圏組合事業の柱として

そうした田辺市の産業振興策に歩調を合わせるように、田辺周辺広域市町村圏組合も様々な地域活性化事業を展開してきた。

「私たちは約40年にわたって広域連携で文化・医療環境整備を行ってきました。そうした土台の上に、圏域に山積する地域課題に取り組み、産業振興を行う。それが私たちの最大の強みだと思います」と事務

局の前芝啓史主査は語る。

域内の第1次産業人口比率は、平成22年段階で15・9%と全国平均の4・2%に比べてみても極めて高い。

前述したように農業では梅や柑橘類、花卉、漁業ではカツオやイセエビなどの産地となっており、昔から「梅干」や「鰹節」、「味噌」、「醤油」などの食文化の原点ともいえる産品を開発してきた。しかし、全国の中山間



田辺市長 真砂 充敏さん



田辺市 産業政策課 交流推進係 松本 早也香さん



田辺市 産業政策課 交流推進係 係長 山本 良明さん



地と同じように少子高齢化の波は、この地域に押し寄せてきており、生産年齢人口比率が域内平均で58.1%と、地域産業を担う後継者不足という課題がある。加えて、価格の低下による地域の主要産業である梅産業の低迷など、極めて厳しい状況下にあるのだ。

今、力を入れているのは、域内における「6次産業化」や「農商工連携」の推進による域内産品の販路拡大と、後継者の育成をはじめ、起業や新産業の創出を担う人材の育成だ。

特に梅産業の一層のブラッシュアップを図る。梅産業では、昨今の「梅酒バー」に見られるような「梅酒ブーム」により、小ロットでも梅酒を生産している業者や、全国各地の蔵元との連携や海外の販路拡大などを目指す業者を支援している。また、しゃぶしゃぶで食べると美味しい海藻類の「ヒロメ」や「熊野本宮」という背景を持ち全国一の産出量を誇る柿、多種多様な柑橘類の加工品など、「地域ブランド」の販路拡大の可能性を探っている。

また、平成20年度以降、毎年のように、人材交流事業として和歌山大学と連携した学生インターンシップや民泊体験交流学習会、滞在型グリーンツーリズム推進事業としてのモニターツアーの開催も行った。

平成22年度からは「地域情報発信事業」として、産業振興に関わる各種講演会の開催、現地産品相談・商談会の開催をはじめ、「スーパーマーケット・トレードショー」への参画や「南近畿地域の農林水産物を対象とした商談会」の開催等に取り組んできた。

昨年度、電源地域振興センターの事業を活用して、2回の「現地産品相談・商談会」を開催。これは生産者・事業者が消費地へ出かける費用を削減できることや、東京から招いたバイヤーに現地を見てもらい、商品の評価や今後の産品開発についてアドバイスを受けることができるもの。平成24年3月の相・商談会では、

「売れる商品」づくりを目指す 圏域内の事業者

食品加工販売会社「熊野の里」は、田辺市内でソーシャルビジネスを展開する事業者のひとつだ。昨年度に開催した圏組合主催の「現地相談・

19の生産者・事業者が参加して大好評であった。ただ、圏域といっても和歌山県の1/3を占める面積を持つだけに、課題も多種多様で、地域振興への温度差は確かに存在する。

「横並びで行うのは無理で、多様な時代なので、産品開発や販路拡大などでは、走ってもらう人はどんどん走ってもらいたいし、その支援をしっかりとやっていきたい。しかし、切り口によって広域的に取り組めることも多く、産品開発や観光関連事業など、事業者を一軒一軒回って、地道にできることからやってきました。それは今後も変わらないと思います」と、田辺市産業政策課に属する地域コー

商談会」にも参加している。

代表取締役の宮崎誓悟さんみやざき せいごの実家は梅干農家。大阪の漬物屋や商社を経て、平成20年9月に46歳で起業した。低迷する梅産業のなか、地域資源を活かした食品加工の製造販売の会社を立ち上げた。主力商品は高菜

の漬物で飯を巻く「めはり寿司」。「めはり寿司」は古くから熊野地方に伝わる郷土料理のひとつで、そうした『ふるさとの味』で2次産業からの6次産業化を目指す。



田辺市 産業政策課 交流推進係
地域コーディネーター 岸上 光克さん

ディネーターの岸上光克さんは語る。一昨年度まで田辺周辺広域市町村圏組合の「健康・観光産業クラスター推進協議会」で事業を推進してきた。

組合事務局の前芝さんも「数値目標を作ってはいけません。数字を作ると、それを追っかけてしまうので。まずは行政、組合、事業者の役割分担を明確にして共通の認識を獲得することです」と口を揃えた。

会社を興して1年目は社員教育を行った。2年目に高菜を裏作で生産する農家と契約して、高品質の高菜を作ってもらうために、肥料の研究などの営農指導から始めた。農家の手取り収入を増やすには裏作しかないと思ったからだ。契約農家は当初の10軒から30軒に増えている。

JAから400坪の土地を紹介され、そこに高菜漬物の加工場を建て、繁忙期には15名を雇用しており、市内中心部の「めはり寿司」の作業場では4名を雇用している。

「低迷する梅産業をはじめ、この地域の1次産業の状況は厳しい。小

右:めはり寿司の作業場
下:「めはり」と「氷雪梅」



規模農家の人たちが少しでも収入を得られるような事業を起こしたかったのです」と宮崎さんは言う。郷土への強い思いが宮崎さんのモチベーション

になっている。現在の課題は、さらなる販路の拡大。昨年度、2回にわたって田辺市内で開催された「現地相談・商談会」にも参加した。そこでは、首都圏

や大阪圏のバイヤーから「地方の素材や健康食品というコンセプトがしっかりしている」という評価を得た。また、この相・商談会では、バイヤーの視点や、バイヤーから期待される事業者の姿はどのようなものかを学ぶこともできた。

今後は、高菜だけではなく、地域産品を活用した新たな商品開発も行って、年商70億円を目指している。営業部部長の南克彦さんは「コンセプトをもっと明確にして、女性を



熊野の里株式会社 営業部
部長 南克彦さん

世界に開かれた持続可能な観光地を目指して ～熊野ツーリズムビューロー～

平成16年にユネスコの世界遺産に登録されて以来、「熊野古道」は全世界から注目され、その知名度は一挙に高くなった。それを背景に「平成の大合併」に伴って平成18年に、田辺市内の5つの観光協会は一般社団法人熊野ツーリズムビューローを設立。熊野地方のプロモーション活動の一環としてイベント行事などを行いながら、国内の募集型企画旅行を実施できる第2種旅行業資格を取得、着地型旅行事業を実施した。



熊野ツーリズムビューロー
事務局長 竹本昌人さん

現在の大きな取り組みのひとつは外国人旅行者への対応。世界遺産登録以降、オーストラリア、アメリカ、フランスなどの旅行者が急増し、団体旅行者のみならず個人旅行者も増加したため、ハード、ソフト両面での域内の整備を行った。

ハード面ではまちまちであった熊野古道にある案内標識の型や色彩を統一。外国人観光客に分かり易い案内標識に変えた。ソフト面では事務局内に外国人スタッフを常駐させ、宿泊地域住民とコミュニケーションを円滑にする日本語と外国語(英語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語)対称の「指差し会話帳」を作成した。また、観光特区でのエリア内外外国語通訳の規制が緩和されたため、事務局スタッフもこの資格に挑戦している。

こうした外国人対応の取り組みの成果は着実に現れてきた。ホームページなどによる予約数はその80%が外国人。本年はすでに34ヶ国から観光客が訪れている。昨年東日本大震災と紀伊地方集中豪雨被害の影響で観光客が激減した時期もあったが、現在では内外の交流人口総数は昨年の6

倍にまで回復した。今後は、関西国際空港からLCCが飛ぶため、東南アジア人をターゲットにしている。

日本人観光客向けには龍神温泉と体験型プログラムをマッチングさせた商品などや、身障者に優しいソーマライゼーションのコース造成、特産品を絡める広域の連携の取り組みも行っていく。

事務局長の竹本昌人さんは「外国人観光客に優しい観光地づくりは、実は日本人観光客にも優しいんです。その意味で、世界に開かれた持続可能な観光地を目指しています」と語る。



ターゲットにした販売戦略や、実演販売、試食販売で得られた消費者の評価を大事にしていきたいと思っています。また、冷凍食品会社や宅配事業者との協働の事業などを考えています」と言う。

田辺市上秋津の新興住宅街の一角に、古い2階建ての廃校舎がひときわ目立つ。その横には木造の「農のある宿舎」、「農家レストラン・みかん畑」などが建ち並んでいる。ここがグリーンツーリズムで全国的に注目を浴びている「秋津野ガルテン」だ。年間6万人が利用しており、運営するのは主に地域内の住民を株主とする農業法人株式会社「秋津野」。「農を元気にし、地域を元気

地域住民とともに グリーンツーリズムを展開する「秋津野」

にする」をコンセプトに、近くにある「秋津野直売所・きてら」の運営も行ってきている。主な事業は、食育事業や貸農園事業、農家レストラン、オーナー樹事業、田舎暮らし支援事業、地域づくり研修受け入れ事業などとなっている。

ここ上秋津地区は、平安時代から集落が形成されていた地域で、明治の水害で地域が崩壊しても長い時を掛け、住民が力合わせ復興を遂げた

～田辺周辺広域市町村圏組合の地域活性化事業～



廃校舎を活用した「秋津野カルテン」



みかんや梅の加工品

そうした過程を経て、平成19年、地域内住民が議決権を持つ株主と、地域外からの株主による農業法人株式会社「秋津野」が誕生し

自信を持った住民は、地域社会のあり方や農業の活性化、地域資源を活用した事業などのマスタープランを作り、住民の出資による秋津野直売所「きてら」やみかんの加工事業「俺ん家ジューズ倶楽部」などの事業を展開する。

平成に入ってから、この地域に新しい住民が流入し、農村地域のあり方が変化していくことに危機感を覚えた住民たちは、平成6年に地域づくり塾「秋津野塾」を結成。町内会、公民館、消防団等幅広い団体が結集し、合意形成を得ながら、農村文化をPRするためイベント交流や農業体験学習を実施してきた。その成果は平成8年に農林水産省の「豊かな村づくり」部門で天皇杯を受賞というかたちで表れた。

という歴史を持つ。昭和時代には、かつての上秋津村の村有財産を地区民に復帰して「社団法人上秋津愛郷会」に所有権を移すなど、地域住民の地域への思いが強い土地柄だ。



農業法人株式会社 秋津野 副社長 玉井 常貴さん

た。その後は冒頭のような事業を展開することになる。

「秋津野」の副社長の玉井常貴さんは、「秋津野塾」の時代から中心となって地域づくりを行ってきた。今では講演で全国を飛び回る。

「肝心なのはどのように地域資源を

広域連携で取り組む地域活性化策のメリットは高い

「平成の大合併」を経た今、自治体にとって「行政の効率化」を図ると同時に「行政サービスの低下」をどのようを防ぐかが大きな課題になっている。その意味では広域連携の重要性はますます強まっているといえよう。

地域産業振興においても、厳しい経済情勢の下で「産地間競争」にさらされている自治体に様々な施策が求められている現在、周辺地域との広域連携による手法が極めて有効といえる。特に、地域産品の販売促進という面では、広域で取り組むことのメリットは高い。個々の市町村にないものを補い合い、地域資源を共有化

活かすか、人や組織をどう活かすかです。産業をどう育成させていくかは、行政や他地域とよく連携して物語にするからです。私たちの経験から言えば、突き詰めていけば地域づくりは『ヒト』です」と、玉井さんは語った。

その意味で「秋津野」は、田辺周辺広域圏組合の人材育成事業でも大きな役割を果たしている。

することで地域は売り易くなる。なぜなら、消費者にとっては個々の市町村名よりも地域の通称のほうが分かり易いからだ。本年8月に「第5次田辺周辺広域市町村圏組合計画」ができあがった。

それによると、「生き甲斐を持ち、快適で住みよい圏域づくり」という基本理念を堅持しつつ、「地域資源を活かした圏域市町村の独自の取り組みを推進するとともに、それらの取り組みを連携させることにより更なる地域活性化を目指す」とされている。

市民に支えられる「田辺・弁慶映画祭」

全国的にフィルムコミッションや音楽イベントなどの「芸術コンテンツ」による活性化事業が盛んだ。田辺市でも2007年から毎年11月初旬に「田辺・弁慶映画祭」を開催している。ちなみに、田辺は源義経の郎党として知られる弁慶の出生地。その名を冠した映画祭だ。2009年から「東京国際映画祭」の提携企画となり、株式会社キネマ旬報社、東京テアトル株式会社の協力を得て、新人監督の登竜門として知られるようになった。



田辺・弁慶映画祭 実行委員会事務局 高井 正臣さん

第6回目となる本年は11月2～4日に開催されたが、コンペ参加は90作品。過去、この映画祭からは沖田修一監督など4監督作品が「市民審査賞」を受賞し、その後商業映画デビューを果たしている。

ももとは、地元民間企業を中心としたフィルムコミッション活動から発展したもので、この映画祭でも行政と民間による実行委員会方式。会費3,000円を支払うと上映作品を見放題の特典が与えられる「市民応援団」と民間企業がスポンサーとなって映画祭を支え、「市民審査員」を募集して審査するなど市民参画によるイベントとなっている。

実行委員会事務局の高井正臣さんは「今後はコンペ参加作品を200～300くらいまで伸ばすことと、市民に支えられた映画祭ですので『市民応援団』の数を増加させることが課題です」と語る。また、「この映画祭を通じて、田辺市民と映画関係者などとの更なる交流の促進につながる」ことを期待している。

今後、田辺周辺広域市町村圏組合は圏域内の地域の独自性を十分に配慮しつつ、様々な知恵を結集させ、地域産品開発や販路拡大、グリーンツーリズムに代表される「ニューツーリズム」の展開などに向けた「織機」のような役割を果たしていくのであろう。

「広域行政」から「広域連携」へ

近頃、広域連携による事業で、地域の持続可能性を探求するという動きが目立っている。

地方圏、特に中山間地における生産年齢人口の減少と高齢人口の増加は、域内市場の縮小から地域企業の収益悪化、税収減少・社会保障負担者の減少、行財政の悪化、公共投資・サービスの削減へと進み、ついには地域社会の過疎化、地域経済の縮小という「負のスパイラル」を進行させている。

この「負のスパイラル」から脱却するために、広域連携による事業で雇用を創出し、行政サービスの改善を行って、定住人口を増加させて地域を活性化しようとする市町村は多い。

市町村間協力については従来「広域行政」という言葉が用いられてきた。交通・情報通信手段の発達によって住民の日常生活圏は市町村の行政区域を越えて拡大しており、消防・医療・水道など効果的な行政サービスを行うためにはさらなる広域化・高度化を進める必要があった。

しかし、「平成の大合併」を経た今、「広域連携」という言葉を用いることが多く、そこには市町村の枠を越えて、行政サービスのみならず、想定する地域の社会・経済の活性化を図ろうというニュアンスが色濃くなっている。

広域連携の地域的枠組み

現在の広域連携の枠組みは、日常生活圏や経済圏を想定するものがほとんどだが、もうひとつ、まとまりとして意識できるのが「江戸時代の『藩』である」という識者の意見がある。

加賀藩や仙台藩、薩摩藩といった雄藩は別として、かつての10～30万石程度の藩域を参考にしても良いの

ではというものだ。そこでは、地産地消型の域内向け産業と、地域特産品などの移出産業の有機的な組み合わせ、城下町を中心とした町割りなどの機能集積や、藩校・寺子屋といった教育システムや、庶民の相互扶助システムなど、文化・社会的繋がりの強い地域となっていた。

現在の生活圏域は、江戸時代とまったく違うという地域はあるものの、地域資源を活用した事業化や地域コミュニティの活性化を図るうえでは、地理的・文化的・歴史的繋がりを基にしたほうが、その可能性は広がるのではないかというもの。これは一考に価する注目したい意見といえる。

広域連携を担う主体づくり

地域産業の活性化においては、「ヒト」「モノ」「コト」「カネ」といった域内の資源を総動員した6次産業化や特産品開発、販路開拓、滞在型交流観光などの内発型の産業振興や、外発型の企業誘致においても地域の強みを活かす産業振興策を推進することには、論を待たない。

また、その過程において地域内での資源や利益を循環させる、交流人口を呼び込み消費を喚起する、地域資源を活用して付加価値を高めた商品を地域外に売り込み、いかに「儲け」を出すかといった仕組みや取り組み手法についても様々語られてきた。

そうした個別の手法とともに広域連携における重要な視点は、出現する農林水産業や商工業、自然環境、歴史・文化などの分野における個人やグループの経営体をいかに連携させていくことができるかということである。

ただでさえ、合併によって行政サービスの低下が心配される多くの市町村には、それを担う人的資源や、財政的なゆとりはないという自治体も

多い。

しかしそれ故に、情報のプラットフォームや関係者間のコーディネーター機能を担う主体が極めて重要で、この主体が広域連携の様々な事業の核となる。

特集で紹介した田辺周辺広域市町村圏組合は40年にわたって、広域連携で文化・医療の環境整備を行ってきており、その土台を基に産業振興に取り組んでいる。また、広域で株式会社やNPO法人といった法人格を持つ事業主体を結成して、事業に取り組むところも多い。

「トップランナー」の創出

最近では「シンクタンク」的な機能に加え、それ自体が具体的な事業を推進する、いわゆる「ドゥタンク (Do Tank)」を広域で結成するところもある。いずれにしても、域内の人材を探し出し、あるいは育成するとともに、外部人材の活用による多様な「協働」の仕組みを作り、コーディネート機能に加えて実際のマネジメント機能を強化した推進主体づくりが、大きな課題となっているのではないだろうか。

マネジメント機能を強化するうえで重要なことは、各経営体のモチベーションの維持である。それを図るためには、連携する様々な経営体による域内雇用創出や定住人口の増加など、小さいものであっても、何らかの「成功体験」が必要になる。そのためには、経営体のなかから「トップランナー」をひとつでも、ふたつでも作り出していく努力を重ねていくことしかない。

「トップランナー」による「成功体験」は、地域内に刺激を与え、良い意味での「競争」に拍車をかけ、創造的で豊かな圏域を形成することになることは間違いないだろう。

平成25年のイベントカレンダー

1月	えびす祭り(阿久根市)★	★水中綱引き(美浜町)
	船魂祭(大間町)★	★上関神明祭(上関町)
2月	★京町二日市(えびの市)	★第2回志賀町祭大漁起舟祭(志賀町)
	★第17回全道PKグランプリ(平取町)	
	★第27回遠州横須賀風揚げまつり(掛川市)	
	六ヶ所村異文化交流フェア2013(六ヶ所村)★	
		第15回カキVSニラまつり(知内町)★
		第34回土佐はし拳全日本選手権南国場所(南国市)★
		→ 第41回只見ふるさとの雪まつり(只見町)
		→ 尾鷲ヤーヤー祭り(尾鷲市)
		→ 第16回2月2日夫婦感謝の日ウィーク(姫路市・高砂市)
		第11回まつえ暖談食フェスタ(松江市)
3月	★ガウンガウン祭(いちき串木野市)	
	福浦の歌舞伎(佐井村)★	
		第17回雪割草祭り(柏崎市)→
	→ 第9回若狭たかはまひなまつり(高浜町)	
	→ 布海苔採り体験ツアー(風間浦村)※期間中3回開催	

電源地域 情報 ひろば

「電気のふるさと」では電源地域の各市町村で開催されるイベントや伝統的なお祭りなどの情報をまとめて掲載するコーナーをつくりました。今回は1～3月の情報です。読者の皆様方で掲載のご希望がございましたら、電気のふるさと編集室までお知らせください。自薦、他薦を問わず受け付けています。なお、掲載にあたり費用が発生することはありません。(誌面の都合上、掲載できない場合がございますことを予めご理解願います)

■地域振興部 振興業務課 電気のふるさと編集室
☎03-6372-7305 E-mail: furusato@dengen.or.jp

おおままち 大間町

青森県

豊かな海を願う ～船魂祭(ふなだまさい)

漁師にとって、毎年1月11日の「船魂祭」はお正月と同じです。



大間稲荷神社での祈願祭

まず、大間稲荷神社で漁業関係者等が参加し、大漁祈願・海上安全の祈願祭が執り行われます。

祈願祭は関係者が祈祷を受け、玉串を捧げた後、神楽舞いを奉納します。

その後、漁師の自宅では大漁旗が飾られ、神棚にはお供えが挙げられ、親戚・知人等を自宅に招き入れ、終わる事を知らない宴会へと続きます。

【開催日】1月11日(金)

【開催場所】大間稲荷神社

【主催・問合せ先】大間漁業協同組合

☎0175-37-3117

しりうちちよう 知内町

北海道

しりうち味な合戦冬の陣 ～第15回カキVSニラまつり

この時期旬を迎える知内町の2大特産品「カキ」と「ニラ」をテーマに開催



来訪客で賑わうメイン会場

される毎年人気のイベントです。

会場では、カキとニラが産地ならではの価格で販売される他、参加各団体による特産品の卸売・創作料理の提供や焼きガキコーナーなど楽しい企画が盛りだくさんです。

知内の冬の味覚を楽しもうと会場は所狭しと大勢の来訪客で賑わいを見せます。

【開催日】2月24日(日)10:00～13:30

【開催場所】知内町スポーツセンター(メイン会場)、知内町中央公民館(カキとニラの販売)

【主催・問合せ先】カキVSニラまつり実行委員会

(知内町役場 産業振興課 商工係内)

☎01392-5-6161

【URL】www.town.shirouchi.hokkaido.jp

びらとりちよう 平取町

北海道

雪上で悪戦苦闘 ～第17回全道PKグランプリ

毎冬開催され、地元平取町はもとより、全道各地から数多くの参加者が集まるイベントです。



雪上PK戦を楽しむ参加者たち

各チーム5名のPKゴールの多い方が勝ちという簡単なルールですが、雪上という事でサッカー経験者でも悪戦苦闘しますが、皆、勝敗にこだわらず楽しんでます。

また、昼食時には地元産の『びらとり和牛』を炭火焼きで味わい、選手・観客ともに楽しいひとときを過ごす事ができます。

【開催日】2月3日(日)

【開催場所】二風谷ファミリーランド内総合グラウンド(平取町二風谷)

【主催・問合せ先】全道PKグランプリ実行委員会

(平取町役場内) ☎01457-2-2223

【URL】www2.town.biratorihokkaido.jp

世界各国の文化に触れる
～六ヶ所村異文化交流フェア2013

2003(平成15)年から開催されている六ヶ所村在住の外国人と六ヶ所村民の



日本語の寸劇を演じる外国人参加者

交流イベントです。年々、参加国や参加者が増えています。

会場では写真やポスターの展示の他、各国ご自慢の料理が味わえるブースが並び、何力国かの民族衣装が試着できるコーナーも設置予定です。

加えて、ステージでは世界の舞踊や外国人による日本語の寸劇披露など、盛りだくさんの内容となっており、世界各国の文化に触れる事ができる1日となっております。

【開催日】2月17日(日)

【会場】六ヶ所村文化交流プラザ「スワニー」

【主催】六ヶ所村国際交流推進委員会

【問合せ先】六ヶ所村国際教育研修センター

☎0175-73-8575 【URL】www.rokkasho.jp

地域に愛され続ける
～福浦の歌舞伎

佐井村の福浦地区では、明治時代に歌舞伎が伝えられ、地区のそれぞれの家に配役や道具方を分担し、代々伝えられてきました。



福浦の歌舞伎の上演の様子

この歌舞伎を伝統芸能として度重なる存亡の危機を乗り越えて、地元で守り続けてきた事が評価され、現在では青森県無形民俗文化財となっている他、福浦の歌舞伎の魅力を広く発信し、末永く伝承させる目的で「歌舞伎の館」が建てられ、稲荷神社の例祭のほか、春を迎える3月頃に定期上演しています。

【開催日】3月中旬

【開催場所】歌舞伎の館

【問合せ先】佐井村役場 ☎0175-38-2111

【URL】www.sai.e-shimokita.jp

温泉も楽しめる
～布海苔(ふのり)採り体験ツアー

冬の風間浦村の観光の目玉として年々評判となっている体験ツアーです。



布海苔採りを楽しむツアー参加者

ツアー内容は、風間浦の新鮮な海の幸を楽しみ、津軽海峡で育まれた布海苔(布海苔は美容と健康にも良いという評判もあります)採りを体験し、海苔採り後は冷えた体を下風呂温泉に入って温めるというものです。

人情と旅情に触れる事のできる絶好の機会なので、是非お越しください。

【開催日】2月下旬～3月上旬(3回開催)

【開催場所】風間浦村下風呂地区・易国間地区・蛇浦地区(各1回開催)

【主催・問合せ先】布海苔採り体験ツアー実行委員会(風間浦村役場 産業建設課内) ☎0175-35-2111

【URL】www.kazamura.jp

春の訪れを知らせる
～第17回雪割草祭り

周りの山々がまだ雪深い3月、日本海を見下ろす小高い丘に一足早く春を告げるように咲き誇るのが「雪割草」です。



雪割草販売会の様子

遊歩道が整備された「雪割草の里」では約30万本の雪割草が群生していますが、毎年一番の見ごろに開催される雪割草祭りでは、雪割草の販売、地元特産品の販売、雪割草技術講習会等が行われ、大勢の愛好者で賑わいを見せます。

【開催日】3月23日(土)・24日(日)

【開催場所】雪割草の里(柏崎市西山町大崎)

【主催】大崎雪割草保存会

【問合せ先】柏崎市西山町事務所 地域振興課

☎0257-47-4010

【URL】www.city.kashiwazaki.niigata.jp

雪を冬の楽しみとして活用
～第41回只見ふるさとの雪まつり

国内有数の豪雪地帯として知られる只見町の冬の一大イベント!!



大雪像上で行われる神楽

会場内には大雪像を始め、大小様々な雪像やかまくらが立ち並び、大雪像にある特設ステージでは様々なイベントが行われます。夜には会場がライトアップされ、祭りの最後には冬の夜空を幻想的に彩る花火大会が開催されます。

また、会場内に立つ「ゆきんこ市」では、郷土の味が楽しめるほか、工芸品や地元の物産品などが数多く並び、毎年多くの人で賑わいます。

【開催日】2月9日(土)・10日(日)

【開催場所】JR只見駅前広場

【主催・問合せ先】只見ふるさとの雪まつり実行委員会(只見町役場 産業振興課 交流推進班内)

☎0241-82-5240 【URL】www.tadami.gr.jp

復興を願う
～双葉町ダルマ市

江戸時代から伝わる新春恒例の伝統行事「双葉町ダルマ市」を



熱気溢れるダルマ神輿

いわき市南台応急仮設住宅で来年も開催します。原発事故により福島県内外に避難している町民が一同に集まり、露店や奉納神楽、ダルマ神輿、ステージイベント等、震災前とほぼ変わらない内容で行います。

今年は約3,000人が来場し、縁起物のダルマを買いたいなど、ふるさとの復興を願いました。

【開催日】1月12日(土)・13日(日)9:00～16:00

【開催場所】福島県いわき市いわき市南台応急仮設住宅敷地内

【主催】夢ふたば人

【問合せ先】夢ふたば 理事 福田一治

☎090-2976-8692

まちぐるみで創り上げる
～第9回若狭たかはまひなまつり

2005年、商店街の声かけで16軒から始まった「若狭たかはまひなまつり」。



商店に飾られる雛人形

毎年参加規模も拡大し、現在では約100軒の商店や民家で、段飾りや御殿飾り、中には江戸末期の珍しいおひなさままで、様々なひな人形に出会えます。

甘酒の振舞いや展示会など空き店舗を利用した休憩所、心あたたまる催し物もたくさん開催されます。旧丹後街道の高浜の街並みを散策しながら、地元の人との触れ合いも楽しんでみてください。

【開催日】2月15日(金)～3月3日(日)

【開催場所】高浜町本町商店街周辺

【主催】若狭たかはまひなまつりの会

【問合せ先】若狭高浜観光協会 ☎0770-72-0338

冬の風物詩 勇壮な伝統行事
～水中綱引き

「昔、運河に大蛇が出て川をふさぎ舟が通れずに村人が困っていたので、大蛇より長い綱を張ったところ大蛇は現れなくなった」そうです。その縁起の良い綱に触れようと海中で引き



綱を切ろうと競い合う青年たち

合ったのがこの水中綱引きの由来だと言われています。当日の早朝、綱が練り上げられ、運河に渡され、周りに大漁旗が張り渡されます。白いパンツ姿にさらしの腹帯、色とりどりのはちまきをした村の青年達が、次々と川へ飛び込み、綱を切ろうと競い合い豊漁を祈願します。

【開催日】1月20日(日)

【開催場所】美浜町日向 日向運河(日向湖と海を結ぶ水路)【主催】美浜町日向区

【問合せ先】美浜町役場 商工観光課 ☎0770-32-6705 【URL】www.wakasamihama.jp

冬の味覚を味わえる
～第2回志賀町祭大漁起舟(きしゅう)祭

一年の大漁と安全を祈願するとともに志賀町の冬の祭りとして始まったのが



大漁旗で埋め尽くされた漁港

「大漁起舟祭」です。豊漁祈願という事で漁港内の船だけでなく、会場内にも所狭しと数多くの大漁旗が掲げられます。

会場には鮮魚販売コーナーや買った魚介類をその場で焼いて食べる事ができる炉端コーナー等が設けられる他、冬の能登の味覚の甘エビ・加能ガ二等がたっぷりに入った大漁鍋が味わう事ができ、家族連れで賑わいを見せます。

【開催日】2月11日(月・祝)

【開催場所】石川県富来漁港

【主催】志賀町祭大漁起舟祭実行委員会

【問合せ先】志賀町役場 商工観光課 ☎0767-32-1111 【URL】www.town.shika.ishikawa.jp

感謝の気持ちを示す
～第16回2月2日夫婦感謝の日ウィーク

「2月2日夫婦感謝の日ウィーク」は毎年2月2日を「ふうふかんしゃの日」として、2月1～7日に夫婦やカップル



2月2日は夫婦感謝の日

ルをテーマとしたイベントやプレゼント・キャンペーンを姫路市・高砂市両市の様々な施設で開催しています。

例えば、「尉と姥」「相生の松」で有名な高砂神社では「夫婦和合長寿特別祈願祭」、「夫婦記念写真撮影」、「夫婦でご当地グルメ」等、お互いに感謝を表す催しが開催されます。

【開催日】2月1日(金)～7日(木)

【開催場所】高砂神社(高砂市)他

【主催・問合せ先】2月2日夫婦感謝の日実行委員会(事務局:NPO法人コムサロン21内) ☎079-224-8803

【後援予定】姫路市、高砂市、高砂市観光協会

【URL】www.com21.or.jp

一糸まとわぬ裸祭り
～尾鷲ヤーヤー祭り

尾鷲神社祭礼の「ヤーヤー祭り」は期間中、毎夜各町の若者衆が町を練る



激しく男衆がぶつかる「練り」

行事「ヤーヤー」が通称となったものです。この名称は、戦国武士の立合いの名残「ヤーヤー我こそは…」に由来すると言われています。

各町の男衆が、「チョウサじゃ」の勇ましいかけ声とともに激しくぶつかる「練り」が街中でくり広げられ、その後、極寒の尾鷲湾に飛び込んで身を清める「垢離かき」という神事も行われます。

【開催日】2月1日(金)～5日(火)

【開催場所】尾鷲神社他

【主催・問合せ先】尾鷲神社 ☎0597-22-1486

【URL】www.city.owase.lg.jp

遠州新年の風物詩
～第27回遠州横須賀凧揚げまつり

「遠州横須賀凧揚げまつり」は全国の凧愛好者による各地域の自慢の凧が集まるイベントです。当日は各地域の伝統的な形や図柄の個性豊かな凧が遠州の空



個性豊かな凧の凧揚げの様子

っ風を受けて、空高く舞い上がります。

また、会場内では子どもでも揚げられる無料凧作り教室が行われ、オリジナルの凧を作り、凧揚げを楽しむ事ができたり、物産品の販売等も行われたり、1日楽しむ事ができる内容となっています。

【開催日】2月3日(日)

【会場】遠州夢農協ライスセンター(掛川市西大淵地区)

【主催】掛川観光協会 大須賀支部

【問合せ先】掛川南部観光案内所 ☎0537-48-0190

【URL】www.city.kakegawa.shizuoka.jp

「酒の国」土佐らしさ
～第34回土佐はし拳全日本選手権南国場所

毎年2月の最終日曜日に
行われる「酒の国土佐」
ならではのイベントです。



真剣にはし拳に臨む参加者

ルールは簡単で、まず2人で向かい合い、それぞれが3本ずつ箸を持ち、それを手の中に隠すようにして互いに前に出し、差し出された箸の本数を当て、負けた方は杯に注がれたお酒を飲まなければならない、というものです。男女入り混じって鉢巻を結び正座をし、真剣にはし拳をする姿に周りから歓声が飛び交います。

【開催日】2月24日(日)

【開催場所】グレース浜すし

【主催】日本はし拳南国協会ほか

【問合せ先】南国市役所 商工観光課

☎088-880-6560

【URL】www.city.nankoku.lg.jp

400年以上の伝統のお祭り
～上関神明祭(しんめいさい)

「上関神明祭」は小早川家の分家である浦景継が上関の領主になってから行われるようになった、400年以上の伝統を誇る祭りです。



燃え上がるご神体

餅つきや神楽などの奉納の後、高さ約10mのご神体に点火します。勢いよく燃え上がる様子は迫力満点です。「煙に触れる事」により参加者は無病息災を祈願し、最後に餅まきが行われ終了します。

【開催日】1月中旬

【開催場所】沖の浜埋立地(上関町大字長島)

【主催】かまどがせき会(菊村洋之会長)

【問合せ先】上関町教育委員会 ☎0820-62-0069

【URL】www.town.kaminoseki.lg.jp

「松江」らしさを味わえる
～第11回まつえ暖談食フェスタ

「まつえ暖談食フェスタ」は豊かな地産食材を活かした料理や松江の食文化等を楽しむ事ができる「食」のイベントで、今回で11回目を迎えます。



賑わいをみせる暖談ごちそう広場

「椿咲く古都の冬まつり」をテーマに、1ヶ月間にわたり松江市内各地で開催され、各店が趣向を凝らした料理を提供する「暖談フェア」や、地元の食材を使った屋台村で賑わいをみせる「暖談ごちそう市場」のほか、豊かな食文化に触れる「暖談グルメ祭」、店自慢の料理とともに松江を語る「暖談晩餐会」などがあります。

【開催日】2月1日(金)～28日(木)

【開催場所】松江市内一円

【主催】まつえ暖談食フェスタ実行委員会、松江市

【問合せ先】松江観光協会 ☎0852-27-5843

【URL】www.plusvalue.co.jp/dandan/

南九州最大の買物市
～京町二日市

京町二日市は90年余りの歴史がある南九州最大の買物市です。



買物客で賑わう京町二日市

市は毎年

2月の第1土曜・日曜に行われ、京町温泉駅前(JR吉都線)から約2kmが歩行者天国となり、地元はもとより、市外・県外から約450店もの露店が並びます。

取り扱われる商品は各種食料品から衣料品・電気製品・生活用品・植木など多種にわたり、安価で販売されるとあって、毎年県内外から訪れる大勢の買物客で賑わいます。

【開催日】2月2日(土)9:00～18:00、2月3日(日)

9:00～17:00

【開催場所】京町温泉駅前通り

【主催・問合せ先】えびの市商工会 ☎0984-35-1544

FAX 0984-35-2644

【URL】www.city.ebino.lg.jp

1年の豊作を祈る
～ガウングウン祭

ガウングウン祭は旧暦の2月2日に1年の豊作を祈願する祭りとして野元の深



寸劇を繰り広げる男たち

田神社で開催される春の大祭です。

田植えの様子を「テチョ」と呼ばれるお父さん役と子供役の太郎・次郎、牛に扮した男の4人によって寸劇が繰り広げられます。

この寸劇は決まった台詞はないものの、それぞれ決まった役を担当する以外は即興的に場を盛り上げるべく、おもしろおかしく演じます。

【開催日】3月上旬

【開催場所】深田神社(いちき串木野市野元)

【問合せ先】いちき串木野市教育委員会 文化振興課 ☎0996-21-5113

【URL】www.city.ichikikushikino.lg.jp

豊漁と航海安全を祈願
～えびす祭り

えびす祭りは毎年1月10日に阿久根市の海沿いの各地区で開催される、新年



えびす様に祈願する和服姿の漁師

の豊漁と航海安全を祈願するお祭りです。

祭りの会場では、化粧直しをし、祭壇に鎮座している男女2体のえびす様を前に和服姿の漁師らが、送神歌の「よいこん節」を厳かな雰囲気の中で歌う中、各人がご神体の前へ進み、「みんなが怪我せんごと頼んでな」、「今年は魚がどっさい獲るつごと頼んど」と祈願します。

【開催日】1月10日(木)

【開催場所】阿久根市内各地区

【問合せ先】阿久根市 水産林務課 ☎0996-73-1211、

北さつま漁業協同組合 ☎0996-72-1511



富岡町生活復興支援センター内
「おだがいさまセンター」事務所風景

電源地域 復興トピックス

被災地の自立促進支援の動きと産消交流

このコーナーでは電源地域各地の地域復興に向けた話題を取り上げています。今回は困難な避難生活を強いられる被災者の自立促進支援事業や製品の販路拡大支援事業、それに首都圏との交流を通じた製品の販売や情報発信事業を紹介します。

E-mail:
furusato@dengen.or.jp



助け合いで取り戻す 町民の絆と自立

春、夜になるとライトアップされた桜のトンネルが印象的で、多くの観光客で賑わいを見せていた富岡町は現在、原発事故により全町民1万5,600人が避難の中にあり、いわき市に約5,300人、郡山市に約3,500人、その他県内約600人、県外に約6,200人が避難生活を送っている。

役場機能を置く郡山市に市内3ヶ所を含め県内計13ヶ所ある応急仮設住宅団地の中で最大規模287戸、435人が暮ら

す富岡町仮設住宅富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」の取り組みを取材した。地元の言葉では、「おたがいさま」と使っていたが、センター名に特徴を表し町民の記憶に残るようにと「おだがいさま」と濁した。

富岡町民の多くは昨年3月12日に当初隣村の川内村へ避難し、避難区域拡大に伴い多くの住民が2次避難を強いられ、郡山市にある福島県施設「ビッグパレットふくしま」へ向



福島県富岡町

かった。当時3,000人以上の避難者が身を寄せ合い混乱している最中、福島県支援チームが全国から寄せられた救援物資や支援人員の割り振りに尽力した。そのチームを指揮していた天野和彦さんが、現在のセンター長である。

センターの役割は、崩壊した住民の生活を復旧する生活支援や制限された環境で住民の自発的意志を促す自立促進支援。避難で離散した住民同士の間をつなぐ取り組みを、現在12名のスタッフで運営している。

その様々な取り組みを紹介する。町民に生の声を伝えようと、震災発生からちょうど1年後の今年3月11日、センター内に「おだがいさまFM」ラジオ局を開局した。番組は毎週月・金曜日の午前8～9時は「おだがいさわやかモーニング」、午後7～9時は「おだがいさまラジオランド」、土曜日の午後1～2時は「とおか76.9(セブンロック)」を放送している。番組のパーソナリティーはスタッフ(内2名は専門)が務め、これまでサッカー日本代表の長友佑都氏や俳優の松平健氏がゲスト出演し町民へ応援メッセージを送った。多くの町民にラジオを聴いていたため、希望する町民へタブレット端末を配布し、使い慣れない中



「おだがいさまFM」スタジオ

高齢者でも簡単に操作できる仕様にして、町の重要なお知らせや町公式ホームページ、おだがいさまFMの放送が聴ける豊富なコンテンツを提供している。ラジオ番組を聴き逃したままの町民がいつでも聴けるよう録音放送も配信している。

月2回発行するセンター情報誌「みやっぺー」は、福島県内の地域情報や町イベントの紹介、各地で開催した町民同士の交流会の報告を掲載。好評を博しているのは、町民の中のお一人との「出会い」を綴った「出会い100選」。読者からメッセージを寄せる機会となり町民同士のネットワークが広がっていて、目標を100人と設定し、その達成を目指している。情報誌は町の広報誌に同封されている。さらに、画期的だったのは、全国に避難する町民の元へ発送している。さらに、画期的だったのは、名前や避難後の住所電話番号、避難前の町内の行政区を記載した「町民電話帳」。モデルとなったのは、東京都三宅島の噴火で全島避難になった三宅村の「島民電話帳」だ。完成までには個人情報保護の取り扱いもあり、町民へ趣旨を説明し、往復は



町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス



未来への「じまんの一品づくり」プロジェクト バイヤー・マッチング商談会」を開催

福島県

11月6～7日、13～14日、20～21日、27～28日の計8日間、福島県内4会場で、経済産業省の被災地復興支援事業のひとつである「未来へのじまんの一品づくり」プロジェクトの一環として、福島県内の事業者と百貨店・食品専門店等のバイヤーを結び付ける「バイヤー・マッチング商談会」が開催された。

2011年3月11日の東日本大震災以降、これまで、復興

支援を目的とした商談会や販売会など、数多くの事業が展開されてきたが、「消費者が支援を目的として買うのではなく、純粋に欲しいと思えるような魅力的な商品がなければ、長期的な支援成果を上げることにはできないのでは」という意図のもとに、本商談会が開催された。

4会場ですべて8日間、延べ55事業者が、1対1の個別面談で、バイヤーから実質的なアドバイスを受け、福島の特産品の開発・改良そして販路拡大を目指した。

がきを送付して同意を得られた方だけ公開した。町民のプライバシー侵害など悪用される恐れもあったが、離散した町民の絆を取り戻すことが一番大事と考え、富岡町長が英断した。現在、町民電話帳は1,789世帯記載し、町民同士の絆が再構築され、大変喜ばれている。

生活復興支援センターの青木淑子さんは語る。

「震災から1年半が経ち、全国から支援をくださった方々のお陰で必要最低限の環境は整いました。でも、見通しの付かない避難生活、町民の中には精神的に疲労し、後ろ向きな

事ばかり考える人もいます。これからは住民一人ひとりに寄り添い、生きがいを見つけ、自立を促していく、なければなりません。震災以前には、なかった人・場所・ものとの出会いが町民の生きがいとなり、再建を始めている人もいます。その人が楽しみを話すことで、自分も何か始めてみようと思つちになります。町民のやりたい事を実現させるためにも、支援に携わる方々のお力添えを借りて解決していきたい」

青木さんは自立を遂げた町民が、次の支援者となる想いを抱き、町民と一心同体で毎日の業務を行っている。

東京下町の亀戸でむつ市が地域産品の販売促進イベントを開催

青森県むつ市

東京・江東区で最も古い歴史を持つ亀戸香取勝運商店街は、「昭和30年代」をキーワードとした、下町情緒に溢れる観光レトロ商店街として知られ、青空市、夜市など様々なイベントが企画されている。

その一角にはアンテナショップ「青森物産ショップ・むつ下北」があり、「元気むつ市応援隊」の応援プロデューサーである河野崇章氏が所属する「社団法人 北のまちふるさとプロジェクト」が下北半島の産品販売と情報発信を常時行っている。

本年10月27日(土)、そうした亀戸香取勝運商店街とむつ市の共催による「むつ市のうまいは日本一! in 亀戸」むつとの遭遇」が開かれた。

このイベントは、むつ市の地域産品の販売促進・情報発信のために今年から始まったもので、今回は春に続き2回目。

今回のイベントでは、そんなむつ市の秋の代表的な味覚である「ホタテの串焼き」や「ぼたん鍋」などが屋台販売され、商店街にある「勝運ひろば」で開かれた津軽海峡産生マグロの解体実演・販売では、訪れた買物客の歓声が上がった。

その他、大道芸人のパフォーマンスや、京都祇園の流れをくむという下北半島最大の祭り「田名部まつり」の「祭り囃子」、ミニ山車の運行披露などがあり、むつ市の「ムチュランファミリー」と江東区の「コトミちゃん」といった「ゆるキャラ」が揃って登場して、亀戸周辺のちびっ子たちの人気を集めていた。

むつ市は地産地消運動を行っているが、同時に首都圏の消費者に向けた地域産品の売り込みにも積極的。こうした首都圏の地域と連携して「むつ市」をま

三方を海に囲まれ、豊かな自然を誇るむつ市は、多種多様な農・林・畜・水産物を産する食の宝庫だ。「むつ市のうまいは日本一!」はこの地の基幹産業であり、地域の食文化を育ててきた様々な食材にスポットを当て、生産現場の真剣な取り組みや流通・加工・料理などを紹介するもの。

るごと売り込んでいく手法は今後も続いていく。



上:買物客で賑わう商店街
下:生マグロの解体実演の様子

〜活力ある地域づくりに向けて〜

電源地域振興センターの企業誘致支援サービス

当センターは、電源地域市町村との豊富なネットワークを持ち、各地の実情に応じた様々な支援を行っております。今回は、市町村の企業誘致に向けた様々な課題を明らかにして、当センターの企業誘致支援サービスをご紹介します。

雇用創出効果の高い企業誘致

全国各地の自治体で、それぞれの地域振興戦略のもと、産業振興や産業立地に向けた様々な取り組みが行われています。

1990年代頃までは、地方における産業振興の主要な政策のひとつとして、企業立地・企業誘致が盛んに行われました。一方、地域資源を活用したソーシャルビジネス(課題解決型事業)に代表される内発型の産業振興も2000年代以降、大きなトレンドとなってきました。最近では、外発型の産業振興ともいえる企業誘致と、地域資源活用型を「農工商連携」や「産学官連携」といった手法を用いて有機的に関連させ、産業集積を目指す地域も増加しています。その意味では、各地域の産業振興策は複合的・重層的になってきているといえます。

そうした中、企業誘致は雇用創出効果のうえで、実効性を持っているため、多くの自治体は用地の整備や

支援制度の整備拡充、自治体内の組織体制と人材の育成、多様な情報発信ツールの整備などの取り組みを行っています。

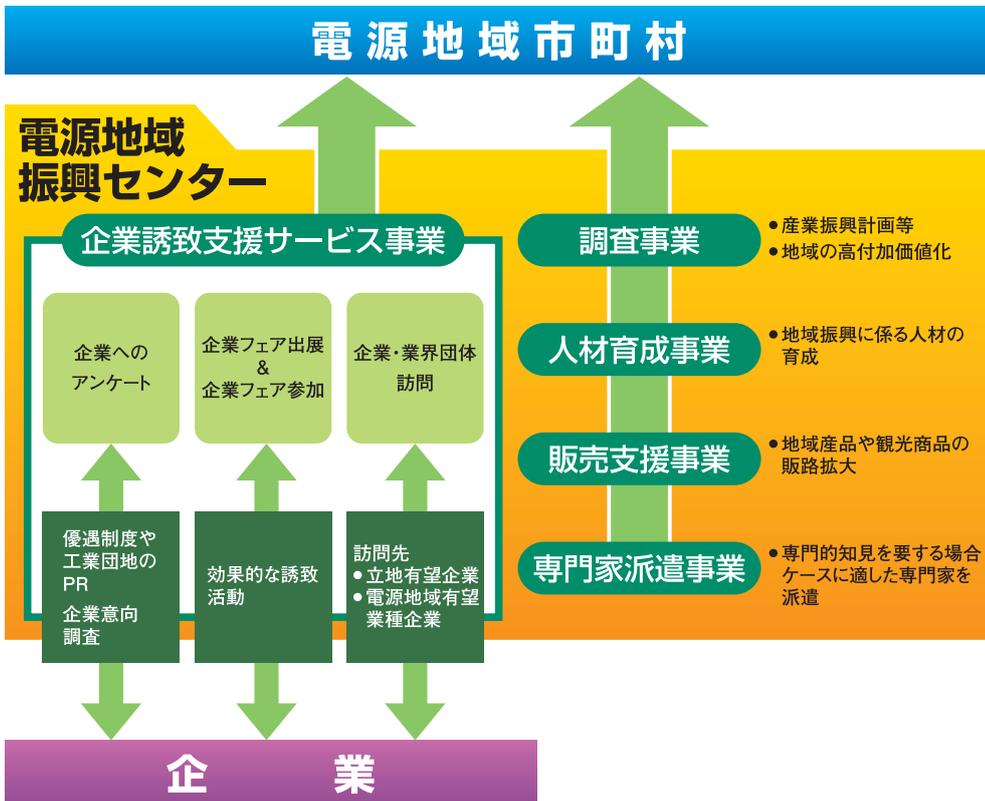
しかしながら、激化する地域間競争の中で、成功率が「千に三つ」とも「万に三つ」ともいわれる企業誘致は簡単なことではないように思われます。

企業誘致にかかる様々な課題

古い資料となりますが、2007年に経済産業省が発表した「企業立地に頑張る市町村」という事例集があります。その中で「特色ある取り組みをしている市町村」として、20の自治体が挙げられています。その取り組み内容に共通するのは、明快なビジョンのもと、企業誘致に携わる専門職員の不足や地域のPR不足を、限られた財源の中で様々な知恵と工夫で克服していることです。

具体的には、産業用地や補助金等の支援制度を整備するといった従来の手法に加えて、全庁的な職員の取

当センターの企業誘致支援サービスのイメージ





本年9月開催の「国際物流総合展」に出展

り組み体制や人材育成、企業に対するキメの細かいフォローアップ、多様な手段を用いた地域のPRなどといった、実情に即した取り組みを行っています。

もうひとつ、特徴的なのは、企業誘致と同時に、地域の高付加価値化を目指していることです。つまり、地域のヒト、モノ、ブンカといった地域資源を掘り起こして魅力的な「地域産品」や「観光商品」といったものに磨き上げるとともに、「歴史・風土」を含む「生活」など、地域の「売り」を作る努力を行っています。

「持続的な企業立地」ということが言われますが、立地した企業に「このまちに来てよかった」と思われるためには、地域の高付加価値化が極めて重要といえるでしょう。

当センターは、こうしたまちづくりの支援事業や、人材育成事業に留まらず、「人員不足」「PR不足」などの様々な課題を持つ電源市町村の状況に対して、以下のような企業誘致支援サービスを行っており、積極的な活用をお薦めしています。

電源地域振興センター 企業誘致支援サービス事業のご案内

1. 受注自治体の工業団地等紹介パンフレットの作成

受注自治体の工業団地等紹介パンフレット（電源地域企業立地ガイド）を作成、アンケート先企業へ送付し、また企業訪問等に活用いたします。

2. 企業への立地意向アンケートの実施およびアンケート結果の報告

1自治体当たり全国約5,000社の企業を対象とした「企業立地意向アンケート調査」を実施いたします。

製造業（従業員数50人以上、売上高5億円以上等）を中心とした企業としますが、成長分野業界（新エネ産業、植物工場など）や電力

多消費業界、自治体の誘致方針に沿った業界等を考慮します。

送付対象は首都圏および受注先自治体近くの都市圏を中心とした全都道府県に所在する企業。

実施内容として、F補助金（原子力発電所施設等周辺地域企業立地支援事業）のパンフレット「電源地域への企業立地に大きな支援」および、受注先自治体の産業団地情報をまとめた冊子「電源地域企業立地ガイド」を同封し、企業への立地意向アンケートを実施します。

3. 企業・業界団体等への訪問によるF補助金および受注先自治体産業団地等のPR（目標100社以上）

企業立地意向アンケートの結果を踏まえ、企業および業界団体への個別訪問を実施します。企業訪問を実施するにあたっては、立地意向のある企業あるいは電源地域に興味を示した企業100社以上を目標として、

電源地域のメリット（原子力立地市町村および、周辺地域に対するF補助金）を最大限にアピールするとともに、本事業をご発注いただいた自治体毎の産業団地、当該地域における優遇制度等をPRしながら情報交換を行います。

4. 企業立地フェア等におけるPR活動（出展および参加）

企業立地フェアへ出展（予定）し、受注先自治体の産業団地をPRします。受注先自治体もPRに積極的に参加していただきます。

また、都内で開催される企業フェアを中心に参加し、他の企業ブースを訪ね、F補助金の紹介ならびに受注先自治体の産業団地についてPRするなど、情報交換の機会を増やす活動を行います。

5. 発注先自治体への報告等

アンケート結果（集計データ・10月頃）および企業訪問結果（日報形式・3月頃）を報告します。

企業が興味を示す産業団地等があった場合、該当自治体と企業との仲立ちを行います。

6. 費用

事業一式として年間300,000円（税込）を予定しています。詳しくは左記までお問合せください。

■窓口は地域振興部 企業誘致課
 ☎03-6972-7300
 ホームページ：www2.dengen.or.jp/html/works/yuchi/yuuchi_00.html

eメール：yuuchi@dengen.or.jp
 お気軽にお問い合わせください。



「電源地域振興センター
内での講演会・研修」の
開催について

当センターでは各市町村の東京ご来訪時に合わせて、各自自治体が必要のテーマに応じた研修・講習会を行っております。

今年度は11月5日(月)に田辺周辺広域市町村圏組合協議会議員ご一行様が来訪され、「特産品支援に関する事業」をテーマとした研修を開催し、当センターの職員が講師役を務めました。また、11月19日(月)に玄海町議会議員団ご一行様が来訪され、「原子力発電と日本経済」をテーマとする講演会を開催し、講師の一人として当センター理事長の新が講演を行いました。
【お問合せ】地域振興部 振興業務課
☎03-6372-7305
ホームページ: www2.dengen.or.jp/html/works/shinko/shinko01.html
eメール: shinkou@dengen.or.jp



定期開催型 第3回「産
品相談・商談会」を
開催しました

電源地域の特産品の開発・改良および販路拡大を目的に、百貨店等のバイヤーをアドバイザーとして8名招聘し、1対1で具体的なアドバイスを受ける機会を定期的に提供する、今年度3回目の「産品相談・商談会」を、平成24年11月8日(木)に電源地域振興センター会議室で開催しました。

11市村17業者団体が首都圏を中心とした百貨店・食品専門店のバイヤーおよびデザイナーと面談を行い、参加者から「ターゲットを明確にし、そのターゲットに見合う内容量・価格を設定するようアドバイスをいただきました」、「関東では馴染みの薄い商材だけに、百貨店出店は難しいと思っていたが、催事出店のチャンスをもたらえるとのこと。是非、首都圏の消費者の声を聞きたい」、「新商品のため、ブランド化するにはかなりの時間が必要。そのため2つの攻略法(B to B・地元で土産としての認知度アップ)をアドバイスいただいた」等の感想が寄せられました。まさに売れる商品作りのステップについて、具体的なアドバイスをいただきました。
第4回(福岡会場)は、1月29日(火)にFFGビジネスコンサルティング(福岡市天神 ※既に募集を締切済)にて開催いたします。
来年度につきましても、開催を予定しておりますが、詳細につきましては、改めてご案内申し上げます。
■現地開催型「産品相談・商談会」
市町村や商工団体等の求めに応じ、百貨店等のバイヤーを現地(地元)へ派遣し、参加者の時間的・費用的負担を軽減するとともに、実施後もバイヤーと相談・商談がし易い関係が継続する現地開催型の産品相談・商談会をご案内いたします。特産品を製造・販売



現地開催型「産品相談・商談会」の様子

する事業者だけではなく、それに係わる地域の関係者を対象とした研修会や、製造のこだわり等をバイヤーに体感いただくための製造現場視察などを組み合わせることも可能です。(ご要望により個別に御見積申し上げます)
■随時開催型「産品相談・商談会」
首都圏出張等の機会に合わせて、百貨店等のバイヤーとの面談の機会を効率よく設け、開発・改良のアドバイスを受けるとともに、販路拡大につながる面談の機会を随時設けます。(参加料: ¥4,000/面談・事業者)
*なお、現地型・随時型につきましては、常時募集をしておりますので、お気軽にお問い合わせください。
【申込み・お問合せ】地域振興部 販売支援課
☎03-6372-7310
ホームページ: www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/sanpin.html
eメール: msp@dengen.or.jp



「企業誘致セミナー」を
開催いたしました

平成24年11月15日(木)・16日(金)の2日間、科学技術館(東京都千代田区北の丸公園)において、平成24年度企業誘致セミナー(研修No.3 『企業誘致による地域活性化』)を実施しました。
北は北海道から南は沖縄県まで39自治体、総数50名の企業誘致関係者が参加し、厳しさを増す経済状況の中で、2日間にわたって企業誘致戦略を学びました。

講師陣は、経済産業省職員・大学教授・会社経営者・金融関係者など5名の多彩な各界の第一人者で、様々な切り口から産業の動向や関連施策、企業誘致に関する実務事例、海外の動向などに於いて熱く講演されました。



話に聞き入る参加者の方々

第1日目終了後には立食形式による「情報交換会」も開催され、なごやかな雰囲気の中懇親を深めました。

今回の研修について参加者からは、「たいへん有意義な研修だった。今後の業務に役立てたい」との声が多数寄せられました。

【お問合せ】地域振興部 企業誘致課

☎03-6372-7308

ホームページ：www2.dengen.or.jp/html/works/yuchi/yuuchi_00.html

eメール：yuuchi@dengen.or.jp



研修のご案内 (人材育成事業)

電源地域振興センターでは、平成2年度から電源地域の皆様を対象とした研修事業を実施し、これまで延べ約2万人の皆様にご受講いただいております。今年度も電源地域のニーズを踏まえ、新たなテーマを設定するなど、引き続き電源地域の長期的かつ自立的な振興支援をお手伝いします。

1～2月の研修につきましては、以下のとおりとなっておりますので、本研修事業を皆様の地域のまちづくりにぜひご活用ください。(各研修内容の詳細につきましては、ホームページをご覧ください)

【申込み・お問合せ】地域振興部 研修派遣課

☎03-6372-7300

ホームページ：www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html

eメール：jinzai@dengen.or.jp

各定員：25名

1～2月の研修(予定)

No.	分野	テーマ	月日	場所	申込み切	研修ポイント
5	地域産業	地域産業の活性化	1月31日(火) ～2月1日(水)	【東京研修】 電源地域 振興センター	1月16日(水)	地域の強みである地域資源の活用や企業・地域間の新たな連携等による地域産業の活性化のための各種方策を学ぶ。
6	観光	地域ぐるみで進める観光まちづくり(※) ～観光地域づくりの中核を担う中間組織の役割とは?～	2月7日(木) ～8日(金)	【東京研修】 電源地域 振興センター	1月23日(水)	それぞれの地域における中間機能(プラットフォーム)の強化と組織づくりの考え方や手法を、事例を通じて学ぶ。
9	協働	多様な主体が活躍する協働による まちづくり	2月14日(木) ～15日(金)	【地方中核】 【都市研修】 福岡県福岡市	1月30日(水)	地域の多様な主体が活躍する協働によるまちづくりについて、講義や事例などからそのポイントを学ぶ。

第3回「電気のあるさと」フォトコンテストの作品受付中!



賞および景品

- 最優秀賞：1点 旅行券3万円分
- 優秀賞：2点 旅行券1万5千円分

*入選された作品は当センターのホームページ、「電気のあるさと～電源地域ニュース～」その他で紹介する予定です。

募集内容

テーマ：「電気のあるさと」

- 皆様の暮らしを支える大切な電気。その電気のあるさとを訪れて、四季折々の自然風景、人々の生活や祭り、その地域を象徴する風物など、電気のあるさとの魅力が表現された作品を募集します。
- 「電気のあるさと」とは、建設準備中・工事中・運転中の発電所等が所在する市町村とその周辺市町村のことです。

*詳細は当センターのホームページ (<http://www2.dengen.or.jp/html/area/>)「電源地域とは」を参照ください。

応募方法

- カラーまたは白黒プリント、A4サイズとします。
- 必ず規定の応募用紙に必要事項を記載の上ご応募ください。
- 写真プリントは、応募用紙と必ずセットで送ってくだ

さい。

- 応募用紙は当センターのホームページよりダウンロードできます。
- お1人様3点までの応募とします。なお、1枚の応募用紙で応募できる写真は1枚です。

応募資格

日本国内に在住の方に限らせていただきます。

受付期間

平成24年10月1日～平成25年3月31日(当日消印有効)。必ず郵送で応募してください(メール便不可)。郵送以外では受け付けいたしかねます。

*注意事項他の詳細は当センターのホームページ (<http://www2.dengen.or.jp/html/works/photocon/>) をご確認ください。

送付先・お問い合わせ先

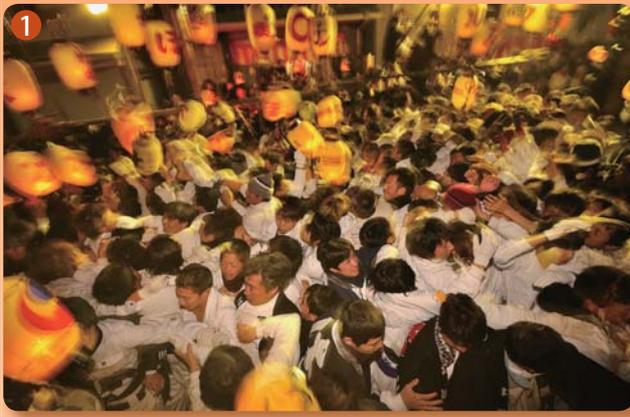
〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町二丁目3番3号(堀留中央ビル7階)

(一財)電源地域振興センター 電気のあるさと編集室

TEL:03-6372-7305(平日10～17時)

FAX:03-6372-7301

E-mail: furusato@dengen.or.jp



表紙：只見町の「只見ふるさとの雪まつり」(第40回「只見ふるさとの雪まつり」フォトコンテスト 只見町長賞受賞作品)
裏表紙：①尾鷲市の「尾鷲ヤーヤー祭り」 ②六ヶ所村の「異文化交流フェア」 ③平取町の「全道PKグランプリ」 ④上関町の「上関神明祭」
⑤田辺市の「野中の一杉」 ⑥柏崎市の「雪割草」 ⑦双葉町の「双葉町ダルマ市」 ⑧高浜町の「若狭たかはまひな祭り」 ⑨田辺市の「天神崎の夕日」
⑩姫路市・高砂市の「夫婦感謝の日ウィーク(写真は「夫婦感謝の日パーティー」)」 ⑪美浜町の「水中綱引き」